

宇目町に伝わる庚申塔縁起

庚申待伝記と三十三基庚申塔

軸丸

勇

(会員・宇目町千束)

『大分県地方史』第九十四号に小泊立矢氏が発表された「県内に於ける中世の庚申信仰」の中で、宇目町の庚申縁起「庚申待伝記」について紹介されている。

「庚申待伝記」は文政三年に宇目郷の神官宮脇大神惟久が書き残したものである。(原本は軸丸勇蔵)全文は後記の通りであるが、前半は神道系、後半は仏教系のいわゆる神仏混交の内容を持つ縁起である。この中に三三ごとに待上げを行ない拜石一塔を建て、これが三十三塔になれば一カ所に埋めて社を建てるとある。

宇目町には写真のように、庚申塔を積み重ねて祠のようにしたものが、上千束と柿木の二カ所に現存している。

私はどうしてこんなことをしたのだろうかと、久しく不審に思っていたが、これは「庚申待伝記」にある「三十三塔になれば一カ所に集め埋めて社を建てると」に該当す

るものであらうと思っている。社を建てるとかわりに、一部を埋め一部を重ねて祠を造り祀ったものであらう。

現在は管理が悪いために少し崩れているが、表面から見ると限りでは、およそ二十二・三基の庚申塔を箱型に積み上げて屋形をつくり、その中に二基(柿木)又は三基(上千束)の庚申塔を祀っている。二カ所とも大体同じような造り方である。

宇目町は庚申塔の数では、県下でも最も多い地方ではないかと思う。それは過去において庚申信仰が盛んであった事を物語るものであらう。酒利一部落だけでも、自然石のものを含めると約三百基の庚申塔がある。また宇目町内には今日でも各所に庚申待の行事が行われている。私は石造美術をたずねて、県内は勿論県外のあちらこちらをさまよい歩いているが、まだ他所において「三十

三基の庚申塔になれば一か所に埋めて社を建てる……」
という例を知らない。もしこんな例をお知りの方は、是非お知らせして下さいさるようお願い致します。

次に御参考までに「庚申待伝記」の全文を掲げます。

◇庚申待伝記 (原文のまゝ)

抑庚申待の由来を奉尋に吾国の始と申ハ、忝も天神七
代地神五代と相続内に、地神三代ハ天孫瓊々杵尊にて、



33 基庚申塔 (上千束)

豊葦原の中ツ
国高千穂患触
の峯に天降り
玉ふ。此時の
や千またに猿
田彦大神出現
し給ふ。此神
武勇の御形象
ニテ眼ハ日月
の如く、鼻長
ク勢高くして、
髪ハおどろに
老茂り、誠に

鬼神如くましましけれハ、天孫も八十萬神ノ供奉ニテ天
降り給ふ御供の神等も、彼猿田彦大神の御よそおひを見
て、詞なくをハしましけれハ、御先供の二香日天細命行
向ひ。其方何れの者やと胸口を開き、御乳を抱へて白ハ
セ玉ヘバ、某ハ鬼神にあらず、此度天孫此国に天降り玉
ふと聞て、御導のため此所に御待申と答へれハ、誠に寄
意の思ひをなし。然ハ其国に引導と命宜を受、高千穂患
触之峯に降臨被遊、夫より此国に内裏を經營被遊、これ
則家作りの始也。又猿田彦大神は土金金備の大御神也。
故に御孫大田命も天照大神宮伊勢の国五十鈴川流れ山田
ノ原に降臨被遊し節も御導被遊。則日本の教ハ太日靈命
の教にして、道ハ猿田彦の道也とあり。然バ士農工商の
四民道一ツにして、御恵に不預事なし。故に庚申ノ日ハ
土金金備の日ゆえに、猿田彦大神を庚申と唱へ祭ル也。
元日本と申ハ忝も土金の徳を以て安く穩に治り玉ふ国の
故に、此神ハ、侍に有ては武運の守り、百姓に有てハ五
穀の豊饒を守り、番匠に有てハ諸職を守り、商人有テハ
売買の利潤を守り、行路にてハ導祖神となりて往来の畜
を守り、船にては船魂となりて海上を守り、海川之獵の
仕合、市町の振々敷支を守り、此国にあらゆる事ハ不残

守り給へども、諸民此大御神の御崇徳を不知仰といへども至誠を尽事薄し。

故に往昔大宝元年丑正月七日庚申の日なるに、摂津国難波の天王寺の民部僧に、年此十七八斗の小兒となり、某ハ天帝の御使也といいて、今日本に所謂庚申待を信する人多しといへども、委敷其由来を不知。汝是より万民に此訳よく解聞せよ。庚申の日ハ一年に六度あり。これを三年祭れば十八座也。いかなる願も成就せずといふことなし。供物等は其時宜願主の分限に引應、三年十八座の内七惣倍にて御返しなざる事疑ひなし。且庚申を待日ハ昼の八ツより行水をなし、衣類を改め内外清浄にして、^(マ)仮約にも人事を云ず、不眠、色欲惡の三道を忘れ、唯御恩徳の難有事を令感通ハ、妙用ハ雨の降るが如く天が下



に充まん
して国土
じんたく
する事疑
ひなし。
去に仍て
此日ハ南

之方に棚を附、幣を立、御神酒、灯明、壇餅、千歳餅、御菓子、熨斗等を備へ祭れば、天地人三方ノ犯せる罪を遁れ、一切の悪事消滅し、殊に病災厄難を祓除、別して癩かん癩の三病ハ人げん界をはなれ、畜生道ニ落ざる内ハ、わずらハざる病なれとも、此の罪を助け玉ハん御せい願也。随分心を清め、身を金にして祈るべし。又庚申待の願主に不加輩ハ、其よ待人の所に咄に参れハ、千日の咎を除かる。又咄ニ不参者ハ、其待人の屋敷内を通して百日の難ハのがすとの御誓約也。前文の如く三年十八座待て、待あげを勤、拜石を一塔立る。三十三度勤て三十三塔立て、一ツに集め埋めて社を立、夫より又新に待也。故に日本ハ申に不及、唐土にても庚申を待人は、元享利貞、福寿無量の御恵み有がゆえに、青面金剛として信す。天竺にては一切経の内に庚申経を来、三世罪を紹介が故に大法支と唱ずるといひ終って、彼童子失。夫祭に仍て民部僧慎て天が下の人民に此事を弘めバ、貴せん老若とも信仰する輩には幸ひをあたへ、末繁昌して一切の願望悉成就し、五穀ハ国に除り、金銀不願して心に足れり。故に猿田彦大神の御神詠に、生れこぬ、さきもむまれて住める世も、まかるも神の懐のうち、と御示し給

へハ、唯正直を以てもととして祈禱を以てさきとす。御教を永く守る事穴賢。

文政三庚辰年

宮脇大神惟久

明治の佐伯三青年 (五)

龍溪・鳴鶴・鶴谷

御手洗 一 而

(賛助会員・埼玉県川越市)

林の上京

矢野が久作から一通の手紙を受けとったのは、晩秋の頃であった。手紙は大阪からであった。林が旧藩士といっしょに上京していることを知らせてあった。久作は安心して大阪に滞在し、林よりも一足早く手紙で知らせたのである。

矢野は秋の大試験に異例の進級をし、ほっとしながらも、向学の情熱はますます盛んであった。当時の塾の初

等教育は、リーダーの口授と文法書を教え、ついで地理又は窮理書(物理学)を読ませ、十カ月頃から歴史書、その後経済並びに文明の文献を講義することになっていったが、当初は英書の訳読が主体であった。矢野自身の「在塾当時の懐旧談」によると、

予が始めて入校せし時其後四五年の有様は、義塾教授の精神は只達者に訳読を教ゆるの一方針に止まりしが如し。或は餘科として時に数学又は発音を学ぶこともありたれども、算は附属の科業にて又永続せしものに